

翻刻『源氏物語古註』（三十四）——わかかな下（その一）——

（山口県文書館蔵 右田毛利家伝来細川幽齋自筆本）

熊 本 守 雄

凡 例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽齋自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽齋が慶長五年当時に在任せし丹後田辺城を石田三成に攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「わかかな下」一帖を、翻刻したものである。ただし、掲載紙面の都合上、二回に分載する。

二、「わかかな下」一帖は、六括りより成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で六括りある。

第一括 料紙七枚十四葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は十三丁）

第二括 料紙七枚十四葉

第三括 料紙七枚十四葉

第四括 料紙七枚十四葉

第五括 料紙七枚十四葉

第六括 料紙四枚八葉（その内、遊紙一丁、更に端一丁は後表紙の見返しとして使われており、墨付は六丁）

料紙七十八葉の内、墨付は七十五丁、百五十面に及んでいる。

三、翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1 注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「」を付し、示した。

2 原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3 原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに、¹オ²ウ²オ²ウ²などの記号をつけた。

4 原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、（一）と、かっこを付して示した。

5 現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6 本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、(マ)と記した。

「わかな下」、詞をもて、まきのなとす。源氏四十一歳の三月より四十七歳までのこもれる也。

一、「ことハリとはおもへども」、上のまきのはての、心かけきとないひそと侍従がいひたるを、ことハリとおもへどもと、うれハしくもいひたるかなと、かしハ木おもハるゝと也。「うれたき」、愁ハしき也。

一、「ことなるなき」とハ、別にたのむ事なき侍従があひしらるのかへしばかりをなぐさめにてハ、いかゞすぐさんと、かしハ木おもへる也。

一、「かゝる一ことをも」とハ、女三の宮のミづからの一ことのふみをもみて、わがおもふことをもいかでいひしらせ奉るべきと、かしハ木おもハるゝ也。

一、「大かたに、おしくめでたしとおもひきこゆる」とハ、源氏をはやくよをのがれ給へかし、女三のミやにちかづきより奉らんと、かしハ木おぼす也。

一、「つごもりの日ハ」とは、三月つごもり、六条院に春おしミにとて「オ人々まいる給へば、物うけれど、女三のミやの御あたりの花をみてもやなぐさむと、かしハ木まいる給へる也。

一、「殿上ののりゆミ」とハ、正月十八日、弓場殿にて、これをい給ふ也。「きさらぎとありし」とハ、正月さしあふ事あれば、二月にもある也。

一、「やよひはた御き月」とハ、藤つばかくれ給たる月なれば、御あそびなどいミ給ふといへる心也。

一、「此院に、かゝるまとゐ」とハ、六条のいんに、ゆミあそびし給ふとて、

「殿上人つどひまいる給へる也。「左右の大将」とハ、夕ぎり・ひげくろ、まいる給てとりもち給へる也。

一、「すけたち」とハ、中少将ハ、大将のすけ也。「いどミ」ハ、あらそひ也。

一、「かちゆミ」とハ、馬にのらでいるゆミ也。騎射とてむまにのりているゆミあるによりて、たゞのゆミをかちゆミといへる也。

一、「まへしりへ」とハ、「まへ」ハ、ひだり、「しりへ」ハ、みぎ也。「こまどりに」とハ、こまかにとりわくるといへる心也。ゆミの上ずへた、てひだりみぎにかたつかぬやうにとりわくる也。

一、「けふにとぢむる」とハ、春のはてけふばかりと、かすミもあはたゞしき心ちすると也。「あはたゞしき」ハ、みだれたつ心也。

一、「花のかげたつこと」とハ、引哥、けふのミと春をおもハぬ時だにもたつことやすき花のかげかハ。

一、「ゑんかけ物」とハ、うつくしき物どもかけて、かちまけをあらそひ給ふ也。「こなたかなた」ハ、ひだりみぎ也。

一、「やなぎのはを」とハ、引、史記云、楚有養由基者。善射者也。去柳葉百步而射之。百發百中之。左右觀者數千人。皆曰善射。やなぎ一はたてゝ、もゝたびいあてたると也。

ながめ給へるを、かたはし心しり給たる夕ぎりのめにハ、ゑもんのかみのけしきハ、わづらハしき事いできぬべきと、われさへおもひつきぬるこゝちすると、夕ぎりおもひ給ふ也。「此きんだち」とハ、夕ぎりとかしハぎ、心かハしてよき御中なれば、かやうにおほさるゝ也。

一、「うちまぎるゝ事あらば」とハ、かしハ木、女三のミヤに心かけ給ふ事のあらハれてハ、いかゞあらんと、夕ぎりおぼす也。

一、「ミづからも、おとゞをミたてまつるに」とハ、かしハ木、源氏を見たてまつり給ふに、をそろしくまほゆきやうにおほさるゝ也。
一、「なのめなる」とハ、大かたの事にも、人にてんつかるべきふるまひハせじとおもふ物を、おほけなく女三のミヤに心かけ奉るハいかゞせんと、思ひわびて、ありしねこをだにえてしがな、おもふ事かたるべくハあらずとも、なぐさめになつげんと、かしハ木おぼす也。

一、「物ぐるをしく」とハ、ねこを物ぐるハしく、ぬミとらんもいかゞあらんと、これさへなりがたき、まして女三のミヤにちかきほどにいひよりたてまつらんことは、いかでかやすかるべきなどゝ、かしハ木思ひわび給ふ也。

一、「女御の御かたに」とハ、いもうとの弘徽殿の御かたに、かしハ木まいる給て、物がたりしまぎらハし心ミ給ふに、おくふかきけしきも、かゝるしたしかるべき中さへ、けどをくならひたるに、ゆくりかに女三の宮みすのひまよりみえ給ひたりし、かるくしとさすがにかしハぎおもひいで給ふ也。「ゆくりか」とハ、卒爾にといへることば也。
一、「おほろげにしめたてまつりたる」とハ、せうくならず女三のミ

やに心しめたてまつりたれば、あさくもおもひなされぬと、かしハ木心也。

一、「春宮にまいる給て、ろんなう」とハ、女三のミヤ御きやうだいなれば、春宮にさせ給ひつらんと、かしハ木おぼす也。

一、「にほひやかに」とハ、うつくしき餘情ありてハ、春宮みえ給ハねども、けだかき御ありさま、なまめかしくおハしますと、かしハ木み給ふ也。

一、「うちの御ねこのあたまきつれたる」と、禁中のねこの子あまたありしが、春宮にもまいる也。此ねこをみるに、女三のミヤの御ねこをかしハ木おぼしいでたる也。

一、「六条院のひめミヤ」とハ、女三のミヤの、御ねこそ、いとよにみえぬさまして、おかしう侍つれど、かしハ木けいし給へば、春宮ハねこおもしろがらせ給ふ御心にて、くハしくとハせ給へる也。
(一)、からねこの、こゝのハたがへるさまして、おなじやうなる物なれど、おかしう人なれたるハ、なつかしき物なると、ゆかしくおほさるばかり、かしわ木けいし給ふ也。春宮に物申すを、けいするといへる也。

一、きこしめしをきて、春宮あんのごとく、きりつぽの御かたよりつたへて、女三のミヤのねこめしよせ給たる也。「きりつぽ」ハ、あかしのひめぎミ也。うつくしげなるねこなりと、人々もけうずる也。興に入てほむる也。

一、「ゑもんのかミハ」とハ、かしハ木ハ、春宮の女三のミヤの御ねこたづねんとおほしめししほどに、さだめてめしよせ給ひつらんとおほして、日ごろへて春宮にまいる給たる也。

一、朱雀院のとりわきかしハ木ハおほしめしてつかハせ給ひければ、此春宮にもしたしくつかうまつり、御ことなどをしへたてまつり給ふとて、まいる給て、ねこどもあまたまいるけり。「いづら、此みし人」ハ」とは、ねこをしる人にせん的心也。やがてかのねこをたづねて、かきなでゝ給たる也。

一、「宮も、げに」とハ、春宮も、おかしきさましたるねこなり。まだなつきがたきハ、見なれぬ人をするにやあらん。こゝなるねこども、ことにおとらずとの給ふ也。

一、「わきまへ心なき物」とは、ねこハかしこき心なき物といへども、その中に心かしこきもあると、かしハ木の給ふ也。まさるねこども待るを、これハしばし給ハリあづからんと申給て、此ねこを申うけ給ふ也。心のうちに、おこがましくもおぼす也。「おこがましき」ハ、ほうけたるなどいふ心也。これを、よるもそばちかくふせて、あけたてバ、ねこのかしづきし、なでやしなひ給ふ也。ともすればきぬのすそにまつハれ、よりふし給へば、きうねうくとなければ、かきなで、「うたてもいふすむ」とハ、ねなんとなくいへる心也。「ねうくとなく」、ねなんとなくと也。

一、「こひわぶる人のかたミとてならさバなれよなにとてなくねなるらん」、女三のミヤの御かたミとてならさば、なれハせで、なにとてなくねなるらん、なくねこそといへる心也。「これもむかしのちぎり」、引、唐の武宗の宮妃の後身、為猫といへる心也。かしハ木も、むかしちぎりし人のねこに生まれきたるかとも也。

一、「こたちなどは」とハ、かしハ木のつかひ給ふ女房たち、にわかなるねこのかしづきかな、かやうなるかしハ木ハ見れ給ハざりしといへる也。

一、「ミヤよりめすにも」とハ、春宮よりめすにも、ねこまいらせ給ハぬ也。

一、「左大将のきたのかた」とハ、玉かづらハ、内府のきんだちよりも、夕ぎりをむかしのまゝにうとからずいひかハし給へる也。「心ばへかどくしく」とハ、玉かづら一かどの心ある人にて、夕ぎりにたいめんの時もこまやかにいふ給ふ也。「大将も、しげいさなど」とハ、あかしのひめぎミの、うとくしくをよびがたくもて

なし給へるに、玉かづらハさまことなる御むすびにて、おもひかハし給へる也。

一、「おとこぎミ」とハ、ひげくろハ、ひとりハひをもてはなれはて給て、ならびなく玉かづらをかしづき給へる也。「此はらにハ」とハ、玉かづらのはらにハ、おとこぎミばかりなれば、かのまきばしらのひめぎミをえてかしづかまほしくおぼせど、おぼぢミやゆるし給ハぬ也。「おぼぢ宮」とは、式部卿のミヤ也。

一、「此きミをだに」とハ、まきばしらのきミを、人わらへならでミんと、式部卿のミヤおぼさる也。「みこの御おぼえ」とハ、式部卿の御おぼえハ、冷泉院の御おぢにておハしませば、御心よせもいとこよなくて、此事とそうし給ふ事ハ、みかどもそむき給ハぬと也。

一、「此院、大との」とハ、源氏、内府につぎてハ、人も式部卿のミヤにはまいりつかうまつり、よ人おもくおもへると也。

一、「大将も、さるよのおもし」とハ、ひげくろも、摂政し給ふべきしたかたなれば、まきばしらのきミのおぼえ、などてかかろからんと也。

一、「きこえいづる人」とハ、まきばしらのきミに心かけ給ふ人、おほきと也。

一、「えもんのかミ、さもけしきばまバと式部卿のミヤおぼせど、ねこにハおもひおとしけるにや、思やらぬぞくちおしきと也。

一、「はゞぎミの、あやし」とハ、ひとりのはひ、なをくひがくしくなり給て、御身ももてけち給へば、まきばしらのきミハ、まはゞの玉かづらのあたりを、ゆかしくおぼして、いまめきたる心ざまにぞありける。

一、「兵部卿のミヤ」とハ、ほたるの兵部卿、ひとりおハしまして、御心につきておぼしける事どもたがひて、人わらへにおぼさるゝに、「さてのミヤハあまへてすぐさん」とハ、されたハぶれてのミ

はいかゞすぐさんと、このまきばしらにけしきばミより給へる也。

一、「大宮、などか、かしづかんとおもはん」とハ、式部卿のミヤ、かしづかんとおもはんをんなごハ、みこたちにこそ見せたてまつらめ。

たゞ人のなをくしきをのミ、いまのよの人のかしこくするハ、しなゝきわざなりとの給て、いたくも兵部卿の心なやまし給ハで、うけひき給へる也。兵部卿のみこハ、あまりうらみ所なく、やがて式部卿のミヤのうけひき給たるを、さうくしとおぼせど、あなづりにくきあたりなれば、いひすぐし給ハで、おハしましそめたる也。

一、「いとになく」とハ、よのつねのことににたるかたなく、式部卿のミヤ、兵部きやうのミヤもてかしづき給へる也。

一、「大宮ハ、をんなごあまた」とハ、ひとりのはい、冷泉院の女御などゝのあつかひおもふやうにもおハしまさぬにこり給へども、此まきばしらのきミをおもひはなちがたくてあつかひ給へる也。

一、「はゞぎミハ」とハ、ひとりのはいハ、ひがくしくなり給ひ、ひげくろハ、わがことにしたがはずと、をろかにまきばしらみはなちたまへばとて、式部卿のミヤ、兵部卿のミヤすミ給ふべきたいのしつらひをも、たちゐ御てづから御らんじいれて、よろづにかしづき給ふ也。

一、「ミヤハ」とは、兵部卿のミヤハ、「うせ給し北方」とハ、さきのさいゐんと申せし人、兵部卿のミヤのものきたのかたなりしが、はやくうせ給たるを、よとゝもにこひかなしミ給ふ也。「よとゝも」とハ、常住也。

一、「むかしの御ありさまに」とハ、もとのきたのかたに、にたらん人をこそ見まくほしけれど、おほすまきばしらあしくハあらねど、さまかハリたる心ちぞし給ひける。かよひ給ふさまも物うげ也。一、「大ミヤ、いと心づきなきわざ」とハ、式部卿の宮、兵部卿のミヤの物うげにかよひ給ふを、心づきなしとおぼす也。

一、「はゞぎミも」とハ、ひとりのはいも、物のけにをかされて、ひがミ給へども、うつし心いでくる時ハ、うきよと兵部卿のミヤの御心をうしとなげき給ふ也。

一、「大将も」とハ、ひげくろも、いたくいろめき給へるみをと、兵部卿のミヤをはじめよりわが心にゆるし給ハざりし事なれば、物しとおもひきこえ給へる也。「かんのきミも」とハ、玉かづらも、かくたのもしげなき兵部卿のミヤの御ありさまを、ひげくろのむこになり給ふをきつて、兵部卿のむかし心かけ給し事をおぼしいで、夫婦になりたらば、いかにくやしきことあらんとおぼす也。「こなたかなた」とハ、源氏も内府も、いかにおぼさんと、玉かづらおぼす也。

一、「そのかミも」とハ、むかしも、兵部卿のミヤに眞実にみえ奉らんとハおもハざりし、たゞなきけくしくの給しを、ひげくろにあへなくちぎりしを、かるくしとやきおとし給ハんと、はづかしく玉かづらおぼす也。「かゝるあたりにて」とハ、ひげくろのむこに兵部卿のミヤなり給て、玉かづらのありさまきゝかよひ給ハん事、心づかひせらるべきと也。

一、「これよりも」とは、ひげくろよりも、まきばしらのきミのあつかひし給ふ也。「せうとのきんだち」とハ、まきばしらのきミのきやうだいたち、兵部卿のミヤのまきばしらのきミすさめがほなる心もしらずがほにて、にくからぬやうにまつハしなどするに、兵部卿のミヤもてはなれ給ハねど、式部卿のミヤの大きたのかたぞさがなくつねにうらミ給けると也。「さがな物」とハ、いぢわるき物と也。

一、「みこたちハ」とは、親王たちハ、ふた心なくちうあひし給はんをこそ、ゑそなくさめにおもふべけれど、大北方の給へるを、兵部卿の宮きゝ給て、むかしいとあはれと思ひし北方をゝきても、はかなきたハぶれ事ハたえざりしに、かうきびしき物えんじハ、なかりし

とおぼす也。「えんじ」ハ、うらミ也。

一、「ふるさとに」とハ、兵部卿のミヤ、わが御所がちにおハします也。

一、「さいひつゝも」とハ、まきばしらのきミに、心いれ給ハぬといひつゝも、ふたとせばかり兵部卿のミヤかよひ給ふと也。「たゞさるかたの」とハ、おほかたおぼしはなれぬ中にて、兵部卿のミヤ過し給ふと也。

一、「うちのみかど」とハ、冷泉院、くらゐにつかせ給て十八年にならせ給へる也。「つぎのきミとならせ給ふべき」とハ、れんぜい院み子おハしませぬ也。よの中はかなくおぼゆるを、心やすくて、心をやりて、のどかにすぐさんとて、日ごろおもくなやませ給ふにことつけて、にわかにおりゐさせ給ぬ。よの人、さかりのみよを、のがれさせ、（ハロウ）

一、冷泉院、源氏廿八歳の時、受禪あり。そのあくる年より、源氏四十六歳までハ、十八年也。じゆぜんとハ、くらゐをうけ給ふ事也。

一、「春宮もおとなび」とハ、今上の御代ことにまつりごとかハラぬと也。

一、「おほきおとどちじのへう奉り給ふ」とハ、大政大臣のちじのれいはなけれど、左右の大臣になずらへてちじし給ふて、内府こもり給ふ也。

一、「かしこきみかどのきミだに」とは、冷泉院だに、おり給へるにと、内府の給ふ也。「としふかき身」とハ、としつもりたる心也。「かうぶりかけ」とハ、官爵をかへし、車を先祖の廟にかけをく也。

一、「左大将」とハ、ひげくろ、右大臣になり給て、摂政し給ふ也。

一、「女御のきミ」とは、春宮の御は、承香殿ハ、春宮の御くらゐにつき給ふをまちつけ給ハで、なくなり給ひたる也。（ハオ）

一、「かぎりある御くらゐをえ給へる」とハ、贈后になしたてまつり給

へども、物のうしろの心ちして、かひなきと也。

一、「六条の女御の御はら」とハ、あかしの姫ぎミの一のミヤ、春ぐうに給へる也。「さるべき事」とハ、かねてかくあるべきと、おもひつれど、さしあたりてハめでたくおぼゆると也。

一、「右大将のきミ」とは、夕ぎり、大納言になり給へる也。

一、「れんぜいゐんの、御つぎ」とは、源氏ハ、冷泉院の、みこおハしませぬことを、あかずおぼす也。「おなじすぢなれど」とハ、あかしのひめぎミのみこ、春宮にたち給たれば、源氏の御すゑたえずわういをつぎ給たる心也。「おもひなやましき御事なくて」とハ、冷泉院の御代、ミだりがハしき事なくてすぐさせ給ひしばかりに、密懐のつミハのがれたると、源氏おぼさるゝ也。「すゑのよまで」（ハロウ）とハ、れんぜいゐんのみ子、わういつぎ給ハぬを、くちおしくおぼす也。

一、「春宮の女御」とハ、あかしのひめぎミハ、みこたちかずそひ給て、おほえならびなくなり給へる也。「源氏のうちつゞき后に給ふべき」とハ、藤つぼ、あきこのむ中宮、あかしのひめぎミ、かくうちつゞきげんじばかりきさきにたち給て、ふちはらうちのきさきの中たえになることを、よ人あかぬ事におもへる也。

一、「冷泉院のきさきハ」とは、あきこのむ中宮ハ、ゆへなきに、げんじのあながちにきさきにたて給たることを、ふかくよろこびおぼす也。

一、「院のみかどは」とハ、冷泉院ハ、おほしめすやうに、ミゆきも所せからで、六条院にわたらせ給ひなどして、おりみさせ給て、めでたくあらまほしくおぼさるゝ也。

一、「ひめミヤの御事」とハ、女三のミヤハ、今上の御心とゞめておもひきこえ給へば、大かたよに、あまねくかしつかれ給ふ。「たいのうへの御いきほひ」とハ、むらさきのうへのいせいには、まさり

一、「みかぐらのかたにハ」とは、かぐらのまひ人ハ、おほくめしつれ給へる也。

一、うち、春宮とうきゅう、院のてん上人、女御どの、むらさきのうへ、かたぐに、心よせつかうまつる也。「ことねりわらハ」とは、中少将のめしぐするわらハベ也。かやうの人々までかざりとへのさせ給へる也。

一、「女御どの、たいのうへ」とハ、むらさきの女御どのとひとつ車くるまにのり給へる也。

一、つぎの御くるまにハ、あかしの上、あまぎミしのびてのり給へる也。女御の御めのと、せんじがむすめ也。あかしの上、あまぎミの心をしりたる人なれば、くるまにのりそひたる也。

一、「かたぐの人だまひ」とハ、女御むらさきのうへの餘情に給ハリ給へるくるま也。むらさきのうへの御かたにくるま五つ、女御の御かたにいつ、あかしの御あかれみつ、くるま給ハリ給ふ也。「あかれ」とハ、さきはしりの人たちわかるゝをいふ也。前丘まへうとこれをいふ也。

一、又、あかしの上、女御・むらさきのうへの車くるまにひきわかれて人だまひのくるまみつ給ハリ給たるといふ心ともいへり。「めもあやにかざりたる」とハ、人給ひのくるまかざり、さうぞくめもよバぬといへる心也。「いへばさらなり」とハ、此くるまども、ほめていへば、ことさらなると也。

一、「あまぎミを、おひのしハのおるばかり」とハ、古今こきんの短哥たんかに、なミのしハにやおほゝれんといへることばをとれる也。心ハ、あまぎミのしハのぶばかり、わかやかせて、まうでさせ奉らんと、源氏の給ふ也。

一、「もしおもふやうなるよをも」とハ、いまのあかしの女御の御はらの春宮、みかどにそなハリ給はんまで、あまぎミながらへ給ハドと、あかしうへハの給へども、あまぎミ此たびハしたひてまうで給へる也。

一、「もとよりかくにほひ給ふ御身どもよりも」とハ、もとより御いせいななる御かたぐより、あまぎミのさいはひあるちぎり、あらハにみえたと也。(13オ)

一、「神かみがきに」、引哥、ちはやぶる神のるがきにはふくずも秋あきにハあへずうつろひにけり。「をともあきをきかぬ」、引哥、

一、もみぢせきときハの山ハふくかせのをとにや秋をきゝわたるらんこゝひく心ハ、をともあきをきかぬがほなる松まつバラも、人々のきぬのいろいろにもてはやされて、もみぢしたるやうなると也。

一、「こまもろこしのがくよりも」とハ、かうらるもろこしのがくよりも、あづまあそびのおもしろくみゝなれたると也。「ほかにて」とハ、よそにてきくよりも、松まつバラの風にひゞきあひておもしろきと也。「つゞミをはなれて」とハ、あづまあそびにハつゞみうたぬ也。

一、「山あるにすれる竹たけのふし」とハ、かものりんじのまつりのまひ人、たけのもん、あをすりしたるうへのきぬ、えびぞめのしたがさねきる也。そのごとく、すみよしまうでのまひ人、いでたちたれば、たけのふしふしハ、松まつのミどりにみえまがふといへる也。

一、「かざしの花の色いろ」とハ、まひ人ハさくら、陪従べいじゆうハやまぶき、かざしければ、あきのくさにことなるといへる也。これハ、つくりばな也。

一、「めのミまがひいろふ」とハ、まがひいろめくといへる心也。

一、もとごはつるすゑつかたに、わかやかなるかんだちめ、かたぬぎており給ふ。あづまあそびに、かたぬぎあり。もとめ子こ、あづまあそびにうたひ給ふ也。うた、やをとめハ、わがやをとめハ、たつやをとめ、たつやをとめ、二だん、神かみのます、このミやしるに、

一、「にほひもなくくろきうへのきぬ」とハ、こきむらさきハ、くろき也。すわうがさね、えびぞめの袖、ひきほころバしたるに、「くれなるのあこめのたもと」とハ、あこめハ、したがさね也。すわうがさ

ね、えびぞめのしたにきたるあこめ、くれなる也。（14オ）

一、「わすれてハ、もみぢの」とハ、松ばらに、色々のきぬのかたぬぎて人々たちまじりたるハ、もみぢのちるにみえまがひたると也。

一、「いとしろくかれたるおぎをたかやかにかざして」とハ、かぐらの人長のさほう也。「おとゞ、むかしの事おほしいでられて」とハ、源氏、「中ごろしづミ給し」とハ、すま・あかしにおちぶれありき給し事かたり給ふべき人なれば、内府を恋しくおほさるゝ也。

一、「いり給て」とハ、ざしきに車に入給て也。「二のくるまに」とハ、二ばんめのあかしのうへの車に、うたよミかけ給へる也。

一、「たれか又心をしりてすミよしの神よをへたる松にこととふ」、あまぎミならでハ、かミよのこををする人あらしの心に、源氏の給ふ也。

一、「かゝるよをみるにつけて」とハ、かくめでたきことをみるにつけても、あかしのうらを、源氏のいまハとわか給し時、かなしかりしと、あまはゞぎミ思ひ出給ふ也。「女御の君のおハせし」とハ、ひめぎミのむまれ給し事おもへば、かたじけなきわが身のすくせと、あまぎミおぼす也。

一、「よをそむき給し人」とハ、入道を恋しく、あまぎミおぼす也。「かつハゆゝし」とハ、なミだのおつるを、いまゝしとあま君おぼす也。

一、「すミの江をいけるかひあるなきさとハとしふるあまもけふやしるらん」、すミよしにいのりしかひありて、めでたき事けふミ奉ると、あまぎミ、これもいのちながくいけるゆへぞと、よミ給へる也。「をそくは」とハ、へんかをそくハ、なさけなからんの心也。「びんなく」ハ、たよりなからんの心也。あかしのうへ、あま君にかハリて也。

一、「むかしこそまづわすられねすミよしの神のしるしをみるにつけ

ても」、あかしのうへ独吟也。すミよしにいのりしるしに、めでたきミよにあふにつけても、むかしかなしかりしことを、わすれぬと也。

一、「霜ハこちたふ」とハ、ことゞしきほど、霜ふりて、松ばらも色かハリたると也。（15オ）

一、「たいのうへ」とハ、紫のうへ、つねのかきのうちばかり、見給たるに、かゝるありきハめづらしきとおほす也。引句、君耳唯聞堂上言、君眼不見門前、みかどよりほかの物をみずといへる所にひく也。紫上よミ給へる也。

一、「すミよしのまつによふかくをく霜ハかミのかけたるゆふかづらかも」、松の霜しろきハ、かミのかけ給へるゆふかづらかと也。「たかむらのあそのの、ひらの山」とハ、をのゝたかむらの、ひもろぎハ神のこゝろにうけつらんひらのやまさへゆふかづらせる、とよめる心を、おほしよせたと也。ひもろぎとハ、かミにたむけたてまつるくごをいふ也。神供の事也。たかむらハ、ゆきの山にふりかりたるを、ゆふかづらにとりなし、よミ給へる也。

一、「まつり心うけ給へる」とハ、源氏のまうで給へるを、かミうけ給へるかと也。

一、「かミ人のてにとりもたるさかきばにゆふかけそふるふかきよのしも」、女御よミ給へる也。「中つかさのきミ」、女御の官女也。よめる、はゞはふりがゆふうちまがひをく霜ハげにいちしるき神のしるしか、「はふりこ」とハ、神人也。しものゆふにまがひたるハ、かミの納受ありたるしるかと也。

一、「つきゞくかずしらず」とハ、記者のことば也。かゝるおりふしのうたハ、上ずのおとこがたさへ、おもふやうにいできがたきと也。

一、「もとすゑもたどゞしげなる」とハ、神樂のもとうた、いかばかりよきわざしてか、なにわざをわれハしつゝかあまてるやひさめの

神をしバしとゞめん。

一、「すゑのうた、いかにしてなにわぎしてかあまてるやひさめのかミをしバしとゞめん。「かぐらおもて」とハ、かぐらまふ人のかほの事也。

一、「まんざい〜」とハ、万歳まんざい〜、まんざいや、よろづよの、まんざいや、さかきをとりかへし、いのるミよのすゑ、おもひやるぞいとゞひさしかるべきと也。

一、「千夜を」、引哥、あきのよのちよを一夜になずらへてやちよしねばやあくときのあらん。（16才）

一、「ときはのかげに」とハ、くるまのしたすだれのひま〜よりミゆる人々のきぬのいろ〜ハ、花のにしきを松ばらにひきくハへたるに〜たると也。

一、「うへのきぬの色〜けぢめをきて」とハ、くれなるむらさきくらゐによりてこきうすきけぢめある也。「けぢめ」ハ、きハ〜也。

一、あまぎミのまへに、せんかうのおしき、ちんのあさき木にてつくりたるおしき也。「あをにびのおもてをりて」とハ、花だのをり物にて、おしきのおもてをはる也。あまぎミのまへに、しやうじん物まいる也。「めざましき女の」とハ、あまぎミ、めにたつほどにたかきすくせと、をのがどちいふ也。「しりうごち」ハ、かげごとにいふ也。

一、「かんだから」とハ、神にまいらせ給ふ物さま〜のたから物也。

一、「よろづのせうえう」とハ、あそび也。「いひつゞくるも」記者也。

一、「かの入道の」とハ、あかしの入道、かゝるめでたき事をもきかず、かけはなれ（16才）たるのミあかぬ事と也。たゞし、又入道のミやこにかへりて、かゝるめでたき事にたちまじりたらば、見ぐるしからん。かけはなれたるハ、ありがたき事と也。

一、「よの中人（マ）これをためし」とハ、入道をまなびて、心たかくむすめ

をみかど（マ）たてまつらんなどゝいひ、心をたかくつかふと也。

一、「めであさミ」とハ、あかしのあま君を、めでつあさむきつとためしなきさいはひ人といへる也。

一、「ちじのおとゞの」とハ、内府のあふミのきミハ、すぐろくうつ時のことばに、あかしのあまぎミ〜とさいハこひ給へる。

一、「入道のみかど」ハ、朱雀院ハ、今上の御事をもき〜いれ給ハず、をこなひのミし給へる也。「春あきの行幸」とハ、朝覲ちゆうきんのぎやうかうあるに、朱雀院むかしおぼしめしいづる也。春あきに行幸ありて、ち〜みかどおがミたてまつり給へる事也。ちうきんのぎやうかうといへる也。（17才）

一、「ひめミやの御こと」ハ、女三のミやの御ことを、おぼしはなたず、源氏を大かたの御うしろミにおぼしめして、うち〜の御心よせあるべく今上に朱雀院申させ給へば、二品にほんになしたてまつり給へる也。みふなども給へらせ給へる也。二品内親王のみふ、二十五戸いでんしじゅうご位田四十町、女三の宮給へら給へる也。くに〜の百姓ひやくしやう廿五戸給へら給ふ也。花やかに女三の宮御いきほひそひ給へば、むらさきのわれハたゞ源氏のもてなしばかりにてこそおほくかた〜にもまさりけれ。あまりとしつもありなば、源氏の御心ばへもをとろへかハるべきとおぼしわたる也。よをそむきあまにならんと、むらさきのうへおほせど、さかしきやうにや源氏おぼさんとつゝみて、はか〜しうもいひいでたまハぬ也。「さかしき」とハ、かしこだてのやうにや源氏おぼさんの心也。

一、「うちのみかどさへ」とハ、今上さへ、女三のミやに御心よせしほに合あ）なりまさらせ給へば、女三の宮と中をろかなるやうに今上にきかれたてまつらじと、源氏わたり給ふこと、むらさきのうへとおなじやうになりゆく也。「さるべき事、ことハリ」とハ、女三の宮とひとしく、むらさきのうへげんじのおぼしめすことハリとハお

ぼせど、さればよ、源氏の御心かハリゆくよとおぼせど、むらさきのうへつれなくもてなし給ふ也。

一、「春宮の御さしづきの女」のミヤを、むらさきのうへとりわき、かしづき給ふ也。此御あつかひに、源氏の夜がれをもなぐさめ給ふ也。いづれもわかず女御の御はらのわかミやたち紫の上かしづき給ふ也。

一、「なつの御かた」とハ、花ちる里は、むらさきのうへの御むまごあつかひをうらやミ給て、夕ぎりの内侍のすげばらのきミを、むかへとりてかしづき給也。心ばへも、されをよすけ給へば、源氏もらうたがり給ふ也。

一、「すくなき御つぎ」とハ、源氏ハ御子すくなきとおぼしめしたれども、すゑへいそひろく、こなたかなたとおほくなり給へる也。

一、左大将さだいらとハ、ひげくる、したしくなりまさり給へる也。「北方きたのあたも」とハ、玉かづらも、むかしのかけくしき源氏の御心もおもひはなれ給へば、さるべきおりくハわたり給つ、紫の上むらさきにもたいめんあり、あらまほしくいひかハし給へる也。

一、「ひめミヤのミ」とハ、女三のミヤぞ、おなじさまにわかとおハすると也。

一、「女御のきミ」とハ、あかしのひめきミ、「おほやけさまに」とハ、きんちうにのミおハしませば、源氏も心やすくおぼして、女三のミヤばかりを心ぐるしく、おさなきむすめのやうに、おほしあつかひ給ふ也。

一、「朱雀院の、よちかく」とは、臨終りんぜつちかくなりぬる心ちして、このよの事をおもひすつれど、いま一たび女三のミヤにたいめんし給ハまほしきとの給ふて、たいめんなくハ此よにうらみのこらんなど、へいその給ハすれば、源氏も、かく朱雀院の給ハせずとも、まいり給ふべき事也と、まいらせ給ふべきことをおぼさるゝに、なにわぎをしてか御らんぜさせ給ふべきと、おぼしめぐらすに、此たび五十

にたり給ハんに、わかなをてうじて、朱雀院しゅくじやういんの御賀ごがのため女三のミヤまいらせたまつらんとおぼしもよほす也。「わかなをてうじて」とは、とゝのへて也。「御ほうぶくのこと」ハ、御法躰ごほうたいの御さうぞく也。

一、「いもゐの御まうけ」とハ、しやうじんの御ようい也。「なにくれ」ハ、何なにやかや也。

一、「あそびのかたに」とハ、朱雀院管絃くわんげんこのミ給へば、衆人しゆじんまひなどの事ことを、心こころことにと源氏おぼして、とゝのへさせ給へる也。

一、「右のおほととの御子」とハ、ひげくろの御子也。「大将の御子」とハ、夕ぎりの御子、藤内侍のはらのくハへて三人、ほたるの兵部卿のミヤのそんわうみなまひ人にさだめ給へる也。「そんわう」とハ、親王しんわうの御子ごしをいふ也。へいそ

一、「家の子のきんだち」とハ、撰家せんけの御息ごきたちをいふ也。「みちくくの物の上ず」とハ、管絃くわんげんのみちの物の上ず、いとまなき也。

一、「ミヤハもとよりきんの御こと」とハ、女三のミヤハ、きんのごとをならひ給けるを、朱雀院にはなれ給てのち、おぼつかなく朱雀院おぼして、まいり給ハんつゐで、女三のミヤのごとのねきかんと給ふと、げんじきゝ給て、此ごろをしへ給ふ也。

一、「うちにも」とハ、今上こんじやうも、朱雀院の御まへにて、女三のミヤのごとをつくしてひき給ハんを、まいりてきかんと給ふと、げんじつたへきゝ給て、としごろも女三のミヤにことををしへ奉り給へど、まだみかどなどのきこしめすほどにもあらぬをとおぼして、げんじ此ごろをしへ給ふ也。

一、朱雀院に女三のミヤまいり給たらんつゐで、院いんもこのねきかんと給ハると、はしたなからんとおぼして、源氏心とゞめてをしへ給ふ也。へいそ

一、「しらべことなる」とハ、ひとかどおもしろかるべきで、ひとつふ

たつをしへ給ふ也。「大きよくども」とハ、大事の秘きよくを、女三のミやをしへ奉り給へる也。「しきにつけて」とハ、春なつあきふゆにかハるべきてをしへ給へる也。「そらのさむさぬるさ」とハ、りつハ寒、呂ハ温也。かんとハ、さむき也。うんとハ、あたゝかなる也。これ、律呂のてうし也。

一、「やうこつなき」とハ、やんごとなき、てのかぎりといへる心也。
 一、「心もとなく」とハ、どんに、おハするやうなれど、女三のミややうく心え給ふて、いとよくならひとり給へる也。

一、「ひとたびもゆしあんする」とハ、「ゆし」ハ、ゆるね也。「あんする」ハ、をすて也。ひるハ人にまぎれ給ふとて、よるく女三のミやをしへ給へる也。

一、「たいに」とハ、むらさきのうへに、御いとまこひ給てをしへ給ふ也。

一、「女御にもたいのうへにも」とハ、紫上にも女御にも、きんことはおををしへ給ハねば、此おり、おさくみなれぬてひき給ハん女三のミやの御ことのねきかまほしきとて、女御も、御いとま申給てまかで給へる也。「おさく」ハ、長じて也。「みこふた所」とハ、女御ハみ子ふたりおハするに、又も懐妊ありて、五月になり給へば、神わざにつけておハします也。

一、「十一月すぐして」とハ、十一月にハ、新嘗曾とりわきての神事也。此御神事過て、女御参内あれとの給へる也。されど此つゝで、かくおもしろき女三のミやのことのねき給ハんと女御参内なき也。一、「なごてわれに」とハ、きんのことを、なごてつたへ給ハぬかと、女御源氏うらみおぼさるゝ也。冬の月ハ、人にたがひて源氏めで給へば、おもしろき月にゆきのひかりあひたるにめづらしきことをひき給ふ也。

一、「此かたに心えたる」とハ、ことすこしもひく人ハめしいで、ひか

せ給ふ也。

一、「としのくれにハ、たいなどにハ」とハ、紫上のうへの御かたにハ、としのくれのいそぎ、をのづから御らんじいれつゝ、ことしげきと也。春のうららかならん夕などに、女三のミやのことのきかんと、紫上の給ふ也。としかへりぬれば、朱雀院の御賀、まづきんちうよりし給へる也。

一、「二月十よか」とハ、女三のミや、朱雀院にまいり給ハん事、二月十日とさだめ給て、がく人まひ人など六条院にまいりつゝ、御あそびたえずある也。

一、「かの人」とハ、むらさきのうへ、あかしの女御、あかしのうへ、女三のミや、この人、さうのこと・びわ・わごん・きんのことあハせて、をんながく心ミンと源氏の給ふ也。「たゞいまの物の上ずどもこそ、此人の心しらひに」とハ、おとこがたの管緞の上ずも、六条院の人ハまざるまじきと也。

一、「よにある物の師」とハ、この上ずといふ人にハあひてならひたると源氏の給ふ也。「たかき家くの」とハ、「御つたへ」とハ、親王家などのことの上ずにもおほひきくらべたるに、いとほづかしきかなとおぼゆる人なかりし。「そのかミより」と、むかしよりも、此ころのわかき人ハ心あさくなりたるとの給ふ也。

一、「きんはた、まして」とハ、きんのことハ、ましてまなぶ人なくなりたる、「此御ことのね」とハ、女三のミやほどひく人さへおさくあるまじきと源氏の給ふ也。「おさく」と、やうやく、あるまじきと也。

一、「なに心なくうちゑミて」とハ、女三のミやうちわらひて、うれしとおぼす也。廿一二ばかりになり給へる也。ひハつにみえ給へる也。一、「院にもみえ奉り給ハで」とハ、朱雀院にもひさしくたいめんし給ハでひさしくなるにねびまさりてみえたてまつり給へと、女三のミ

やにことにふれての給ふ也。げに源氏のかくうしろ見給はずハ、いハけなき御ありさま、かくれなからんと、人々おもふ也。

一、「月たゞば」とハ、正月たゞば、御賀のいそぎちかゝるべし、かき（ハ）あハせ給はんことのねも、しがくめて人いひなさんと、此ごろ心ミ給へとて、「しんでんに」とハ、女三のミヤの御かたへ、みなわたし給ふ也。

一、「われもく」とハ、むらさきのうへ、女御、あかしのうへの女房（ハ）たち、御ともに、われもくとおもへども管絃のかたにとをき人ハえりとゞめ給へる也。「すこしねびたれど」とハ、としよいたれど、よしあるかぎりえりてめしつれ給ふ也。わらハ、かたちすぐれたるかぎり四人、「さくらのかぎミに、うす色のをり物のあこめ、うきもん（ハ）のうへのはかま、くれなゐのうちたる、さま」とハ、これハ、はだにきたるひとハ也。うちぎぬ也。「さくら」ハ、おもてしろく、うらえびぞめ也。「うす色」とハ、うすむらさき也。これハ、むらさきのうへのわらハベ也。

一、「女御の御かたにも」とハ、なにいろのきぬとハみえず、正月あらたまれるころなれば、くもりなきさうぞくともなると也。（ハ）わらハ、あを色にすわうのかぎミ、からあやのうへのはかま、あこめはやまぶきなるからのきを、「おなじさまに」とハ、四人ながらおなじやうなると也。「あを色」ハ、うハぎ也。「あこめ」ハ、したぎ也。「かぎミ」ハ、すわう也。「うへのはかま」ハ、からあや也。「やまぶき」ハ、おもてくちば、うらくれなゐ也。「からのき」ハ、からにしき也。これハ、女御のわらハベ也。

一、「あかしハ、こうばあふたり、さくらふたり、「こうばあ」ハ、うハぎ也。あを色ハ、かぎミ也。「あこめハこくうすく」とハ、こむらさき、うすむらさき也。「うちめなどえならで」とハ、あこめ、うちぎぬ也。

一、「ミヤの御かたにも」とハ、女三のミヤも、わらハベのすがた、こにつくろハせ給へる也。あをに、やなぎのかぎミ、えびぞめのあこめ也。「あをに」ハ、こきあをに、黄をさしたる色也。青丹にとかく。あをき色に、あかき色まじりたる色也。やなぎかぎミ、あをにハ、うハぎ也。あ（ハ）こめハゑびぞめ也。あかむらさき也。「やなぎ」ハ、おもてしろく、うらあをき也。女三のミヤのけハハハ、大かたのさまけだかくいとならびなくみえたる也。

一、「こなたかなた」とハ、むらさきのうへ、女御、あかしのうへなど、木丁ばかりをへだてにて、おハします也。中のまに、源氏おハします也。

一、「右のおほいどの、ひげくろの三郎ぎミ、玉かづらのはらのあにぎミさうのふえ、夕ぎりの太郎ぎミよこぶえとふかせて、すのこにさぶらう。さうのふえとよこぶえとふかせてといふ心也。

一、「ひし給ふ御ことども」とハ、秘蔵し給ふ也。「うるハしき」ハ、花麗なるこんぢのふくろに也。紺地也。

一、「ミヤにハ」とハ、女三のミヤ、ことくしき御ことハまだえひき給ハじとて、れいのてならし給へるを、源氏しらべてまいらせ給へる也。

一、「さうのことは、ゆるふとなけれど」とハ、心ゆるすとなけれど、あまたの物にあハする時、ことぢのみだるゝ物なりと、源氏の給て、をんなハえしらべしづめ給ハじとて、夕ぎりめしよせ給へる也。ことにふえふき給ふきんだちもおさなしと、源氏の給て、大将こなたへとめしよすれば、みな御かたゞはづかしと、心づかひし給へる也。

一、「わごんこそ」とハ、しらべおほくハなけれど、わごんハてさだまらぬ物なれば、むらさきのうへいかゞひき給ハんと、源氏おぼさるゝ也。

一、春の物のねハ、大事なるを、ことさらあまたかきあハせ給へば、みだれやせんと、源氏の給ふ也。

一、大将、いといたう心げさうして、御ぜんの心ミあらんよりハと、心づかひし給て、あざやかなるなをしなど、たきしめて、まいり給へる也。

一、「うぐひすさそふ」、引哥、花のかをかせのたよりにたぐへてぞうぐひすさそふたよりにはやる、ことばばかり引也。おとゞの御てんのあたり也。^{23ウ}

一、「みすのしたより」とハ、女御のおハしますのしたより、さうのとさしいで給て、これがをとゞのへてしらべ心ミ給へとの給へば、「いちこちでうに、ばちのをゝたてゝ」とハ、第一のをゝばちのをといへる也。初絃しよげんといふ心也。かきあハせて、ひとつひき給へと、女御の給へば、けふの御あそびのさしいらへに、まじるばかりのてづかひ、おほえずとの給へど、をんながくにごことまけてハにげにけりといはれんハ、くちおしきとて、しらべはて給て、かきあハせてまいらせ給へる也。「かきあハせ」とハ、十三げんみなのでうししらべあハする也。「むまごのきんだち」とハ、夕ぎり玉かづらの御子どもたち、源氏のむまごのきんだちとの給ふ也。

一、「びわハすぐれて」とハ、あかしのうへのびわ上ずと也。「かみさびたるてづき」とは、上代じやうだいのてつきいまのよにめづらしきの心也。一、「わごんに大将みゝとゞめ」とは、むらさきのうへのわごんに夕ぎりみゝ24オとゞめてきゝ給ふ也。「わぎとある上ずども」とハ、わごんの上ずといふおとこかたのにもすぐれてにぎハしくひき給たると夕ぎりおほす也。

一、「やまとご」とハ、わごんをいふ也。「ふかきらう」とハ、辛勞してならひ給へるほどしるきと也。「おとゞ、御心おちゐて」とハ、源氏も、紫上のわごんすぐれたるをうれしときゝ給ふ也。

一、さうのことは、女御のつまをと、物のひまぐもりいでゝ、うつくしきねにきこゆる也。きんのことは、わかきかたなれど、ならひ給ふさかりなれば、たどくしからず、いうにきこゆる也。

一、「すこしふつゝかに」とは、こゑおほきに源氏うたひ給ふ也。「ふつゝか」とは、こゑおほきにつよき心也。

一、「月心もとなき」とハ、春のおほる月なれば也。

一、「ミヤの御かた」とは、源氏、女三のミヤのかた見給ふ也。人よりちいさくお24ウハしませば、御ぞばかりあるやうにみえたと也。たゞあてやかにみえ給ふ也。

一、「二月の中の十日ばかりのあをやぎの」、引、白雪はくせつ花はな繁はげ空そら撲うち地ぢ、りよくしなまはうしうひまにたす緑りよくしなまはうしうひまにたす枝えだ弱じやく不ふ勝しょう鷲じゆ又、引哥、うぐひすのは風になびくあをやぎのみだれて物をおもふころ哉、

一、ことのふくろをたゞみてをき給ふに、ちいさくおハしませば、てをさしやり給ふさま、うつくしくみえ給ふ也。

一、女御のきミハ、女三のミヤとおなじとはへの、いますこしうつくしきにほひくハりて、よくさきこぼれたるふちの花の、なつにさきかゝりたる心ちし給へる也。「ふくらかに」とハ、懐妊なれば、なやましげに、けうそくをしかゝり給へる也。「さゝやか」ハ、ちいさやかなる也。

一、むらさきのうへハ、えびぞめの御ぞに、色こきうちぎ、こきむらさきのうきゝ給へる也。ほそながハ、うすゝわう也。「ミぐしのたまれるほど、こち25オきたく」とハ、ことくしきほど、御ぐしながきと也。「花といハゞさくらにたとへても、物よりすぐれ」とハ、万物にすぐれたるといへる心也。

一、あかしのうへハけをさるべきを、さもみえず、心のごこゆかしげなるもてなしとみえたる也。やなぎのをり物のほそながに、もえぎにやあらん、こうちぎき給て、もをはかなげにひきかけて、官女くわんぢよの

やうにひげし給たる也。

一、「こまのあをぢ」とハ、かうらひのにしきにて、へりさしたるしとねに、まほにもみで、びわをしとねにハうちをきて、たをやかにつかひなしたるばちのもてなしすぐれたる也。「さ月まつ花たちばな」引哥、たち花ハみさへ花さへそのはさへえだに霜をけはましとしもきハの木、橘たちばなの花もミもそへておりたる心ちすると也。

一、「うちとけぬけハひ」とハ、平懐躰へいけいわたらのけしきなくけだかきけハひを夕ぎり見給ふに、うちゆかしくおほえ給ふ也。「たいのうへの」とハ、むらさきのうへあぶつの、みしおりよりもねびまさり給ふらんとしづ心なくゆかしきと也。

一、「ミやをば」とハ、女三のミやハ、いますこしすくせをよバで、わが物になしたてまつらぬと、夕ぎりおほす也。「院ハたびく」とハ、朱雀院ハたびくわれをむこにてもみるべき物をとの給ハせしと、夕ぎりおほす也。

(一)、「しりうごと」とハ、かげごとにも給たる也。「すこし心やすき」とハ、女三のミやを源氏も心やすくもてなし給へば、女三のミやあなづりおもふにハあらねど、心うごくほどハおもハぬと、夕ぎりおほす也。

一、「此御かたをば」とハ、紫上をば、おもひをよぶべきかたなければ、いかでたゞ大かたにても心よせあるさまを見え奉らん、とばかりおほさるゝ也。夕ぎりおほけなき心にハあらず、夕ぎりよく心をもてしづめ給へる也。

一、「ふしまちの月」とハ、廿日の月也。おぼろ月よにもあきのあハれまさりたると源氏の給へば、夕ぎり、あきのよのくまなき月には、26こほりなきに、ことふえのね、すめる心ちすれど、花の露にも、めうつり心ちりて、かぎりこそ侍れ。春のそらのかすミのまより、さしいでたる月かげに、ふきあハせたるこそ、ふえのねなど

も、えんにすミのほりおもしろく侍る。女ハ春をあハれむとこそ、ふるき人もいひけれと、夕ぎり申給ふ也。引、女感をんなのこころをかんてはる三陽氣やうき一春思おとしをふもふおほいんをかんじてあまおほしをおもふ男おとこ、とかやうに夕ぎり紫むらさきのうへの春をこのミ給ふ時宜ときぎにの給ふ也。

一、「いな、このさだめよ」とハ、春あきのあらそひに、むかしより人わかかねたることを、すゑのよの人、あきらかにいかゞさだめんと源氏の給ふ也。「物のしらべ、きよくの物ハ、げにりちをつぎにす」とハ、呂律りよぢとこそいへば、げに春のしらべまさるともいふべしと、源氏もの給ひなをすハ、紫むらさきの上に時宜ときぎなるべし、夕ぎりのよくの給たるとおほしたる也。26

一、いかに、たゞいまのいうそくの人々の、御前ごまへにて、たびく心ミさせ給ひしに、すぐれたることの上ずハ、かずすくなくなりたるに、そのかミの上ずのことのね、まなびとらぬにや、此をんなたちの中にひきませたらんに、すぐれたるハあるまじげなるとおほゆると、源氏夕ぎりにの給ふ也。

一、としごろむもれたるみゝのひがくしきにや、こよひきゝしことののねにすぐれたるハあるまじげなる、あやしく、人のぎえとりするわざも、物のはへありておほゆると、源氏六条院のうちをほめ給ふ也。

一、そのおまへのあそびに、ひときわのことの上ずハその人かの人といかにあるぞ、こよひのをんながくにまさるべきかと夕ぎりに源氏の給へば、夕ぎり、それをこそとり申さんとおもひつれど、をよすけたるやうにとおもひて申いでざりつれとの給ふて、のほりてのよをばしり侍らず、ゑもんのかミのわごん、兵部卿のミやの御びわなどどかをこそ、此ごろめづらかなるためしにひきいで侍めれ。げにかたハらなきを、こよひうけ給ハる御ことののね、みゝをどろかし侍るハ、かねてかやうならんともおほえず、たゆミけるにや、心さ

ハがし侍りて、さうがなどもつかうまつりにくかりしと、夕ぎりの給ふ也。「たゆミ」とハ、ゆだんして、うけ給ハリしゆへかと也。

一、「わごんハ、かのおと」とハ、内府ばかりこそ、おりにつけてこしらへなびかしたるねを、かきたて給へれ。「おさくくきハはなれぬ物に侍める」とハ、わごんハ人にすぐれてひく人まれなるに、むらさきのうへのあそバしたるハきはなれたると也。「こしらへ」とハ、なぐさむばかり人の心なびくやうなると也。「おさくく」とハ、長じてひく人なきて夕ぎりの給ふ也。

一、「ことくしきハにハ」とハ、さやうにことくしくほめ給ふほどのことならぬ分を、うるハしうもひきなざる」とハ、まめやかにほめ給ふと、したりがほに源氏の給ふ也。「けしうハあらぬ」とハ、いやしうハあらぬでしどもと、源氏、むらさきうへ女三のミヤ、女の事をの給ふ也。

一、「びわハしも、こくにちいる事まじらぬ」と、あかしのうへのびわハ、わがをしへねども、さりながら、けハひことになりたるとの給ふ也。「おぼえぬ所にて」とハ、あかしにてきそめたるに、めづらしき物のこゑかなとなんおぼえし。あかしにてよりハ、きまさりたる也。

一、「われかしこ」とハ、源氏、わがかしこくをしへたてたるとの給へば、女ばうたちつきしろひわらふ也。

一、よろづの事、みちくにつけてならひまねバ、ざえといふ物、いづれもきハはなる事ハあるまじくおぼゆると、源氏の給ふ也。

〈28オ〉

一、「なにかハ、そのたどりふかき人」とハ、ふかくたづねしり人のなけれバとハ、くはんげんのみちならひしる人なかりければ、おほかた心をやりてもあるべきを、きんのことハ、てふれにくき物なれば、ならぶ人おさくくなきと也。「心をやりて」ハ、心なぐさめて也。「お

さ」ハ、長じて也。

一、「此ことを」とハ、きんのことを、むかしのまゝにとハおにがミをやハらげて、引、莫下把二悲絲一寫離怨上、深夜簾外鬼神愁。
一、「あにつちをうごかし」、引、樂書云、師文之變二易寒暑一、孫登之感レ動風雷一、謂琴事也。又、琴書云、師曠晋之樂官也。上二於琴一能易二寒暑一占二風雨一晋為二平公一軼之感玄纒六下舞。

一、「かなしミふかき物」とハ、きんのことをよくならひひく人ハ、かなしミをあらため、よろこびにかハリ、いやしくまづしき物ハたかき世にあらたまり、^{28ウ}たからをえるといへり。「此くに、ひきつたふ」とハ、きんのことハ、波羅門僧正日本にわたし給たる也。聖武天皇の御代也。

一、「おほくのとしをしらぬくに」とハ、うつぼのとしかげがはしくにわたるてきんのことをならひたると也。「まどひてだに」と、しらぬくに、まどひありきてだに、ひきえることハかたきと也。

一、「あがりてのよに」とハ、上代にハきんのことをひきて月ほしをうごかし、時ならぬ霜雪をふらせたる人ありしと也。「いづこのそのかミのかたはし」とハ、いづくにか、むかしのかたはしをも、きんのことならひたる人あらんと也。

一、「なまづくにならひて」とハ、なまじるにきんのことハならひて、おもふほどひかぬ人おほくて、のちくくにハきんのことひけば身にあしきこといでくるといふなんをつけて、うるさきまゝに、いまハおさくくよにつたはらぬと源氏の給ふ也。「おさくく」ハ、長じて也。

〈29オ〉

一、「きんのねをはなれて」とハ、衆器之中、琴徳最優。
一、「物をとへのへしる」とハ、管絃をとへのへしるみちとハ、きんことなると、なにをならふべき、とげんじの給ふ也。
一、「もろこしこま」とハ、くはんげんのミちをとろへすたるよに、き

んのことをならハんとて、かうらいたうどまでまどひありかバ、よ
の中にひがめる物になるべし、と源氏の給ふ也。

一、「なのめにて、此ミちを」とハ、大かたにて、きんのことをつたへ
しるべきやうに、などかやすきつたへをしをかざりけん、と源氏の
給ふ也。「なのめ」とハ、大かたに、といへることば也。

一、「しらべひとつに」とハ、ことを一すぢにもてをひきつくさんこ
とばかりなきと也。「いはんや、おほくのしらべ」とハ、二十五げん
なれば、むつかしきよくおほきと也。「心にいりしきかり」とは、源
氏心にいれてな²⁹らひ給ふさかりにハ、よにありといふきんのふ
をたづねならひ給たると也。「こゝにつたハリたる」とハ、日本につ
たハリたるふハ、のこらず見あハせて、ひきたると也。「ふ」とハ、
ことをならふふミ也。「のちくハ師とすべき人もなくて」とハ、わ
が心づからたくミいだしておもしろきてひきたると也。佛智にも無
師智といひてわれとさとりいだし也。祖師禪にも無師得悟の人あり
諸道いたりぬれば自得する也。

一、「なをあがりての人にハ」とハ、かやうにならひ心をつくしても上
代の人にハあたるべきほどにもあらじ、と源氏の給ふ也。

一、このちとてつたハるべきすゑもなき、源氏の給へば、大將げに
いとくちをしくはづかしとおぼす。大將ハ、夕ぎり也。

一、「このみこのたち」とハ、女御の御ごたちにつたへんと源氏の給へ
ば、あかしのうへ、いとおもたゞしくおぼす也。「おもたゞしく」
ハ、めんぼくありと也。³⁰

一、「女御の君ハ」とハ、さうのことをむらさきのうへにゆづり給て、
よりふし給へる也。「あづまを」とハ、わづらひを、むらさきのうへ、
源氏にゆづり給へる也。

一、「かつらぎあそび給ふ」、引、さいばら哥、かつらぎのてらのまへ
なるや、とよらのてらのにしなるや、二だん、えのはるにしら玉し

づくや、ましら玉しづくや、をしとんとしとんとく、源氏おりか
へしうたひ給ふ也。

一、「さうの御こと」とハ、女御のつまをとハ、「はゞぎミの」とハ、
あかしのうへの、てのけハひくハゝりて、ゆのねふかう、すみてき
こえたる也。「ゆのね」ハ、ゆるね也。

一、「此御てづかひ」とハ、むらさきのうへのてづかひかハリて、おも
しろく、きく人たゞならずそゞろハしきまで、りんのでなど、いと
かどある御ことのねなると也。そゞろハしきと、身のけもよだつほ
ど、おもしろきと也。「りんので」とハ、りんせつなどひきつけ給ふ
也。

一、「かへりごゑ」とハ、りよよりりちにうつるをいふ也。³⁰

一、「きんかのしらべ」とハ、かくて、かたたり、すいうひやう、さう
かいは、かんめいてう、といへるきんのことのひきよくをへ給
たるを、女三の宮ひき給たるおもしろきと也。「五六のばち」、古来
未決也。

一、「春あきよろづの物に」とハ、五かのしらべ、よろづの物のねにし
らべあハせて、はるあきにもかよひておもしろきてなると也。

一、「此こぎミだち」とハ、ふえふき給へるきんだちの、心にいれてふ
き給へるうつくしと源氏おぼして、ねぶたくこぎミたちおもふらん、
と源氏の給ふ也。

一、「きゝわくほどのみゝとからぬ」とハ、みゝりこんならで、ことの
ねきゝわかぬとの給ふ也。さうのふえふくきミに、げんじ御ぞかづ
け給へる也。

一、「よこぶえのきミにハ、むらさきのうへのかたより、ほそなが、は
かまかつけ給へる也。大將のきミにハ、女三のミやの御さうぞくか
づけ給へる也。

一、「あやしや。物の師をこそまづ」とハ、源氏われをこそこの師な

れば、^{いさ}まづひきいで物かづけ給ふべけれ、との給ふ。女三のミヤのおハしますみきちやうのそばより御ふえをたてまつる也。とり給て、ふきならず也。いみじきこまぶえ也。かうらいのふえ也。すこし源氏ふきならし給へば、みな人々たちいで給ふ也。「大将たちとまり」とハ、夕ぎりの御子のもち給へるふえふきたて給へるが、いとめでたきと也。

一、「いづれも」とハ、みなこともふえも、源氏の御でしなれば、わがぎえのほどありがたくおぼししらるゝと也。

一、「みちすがら」とハ、夕ぎり、むらさきのうへのさうのことの、かはりておもしろかりつるのミ、恋しくおぼえ給ふ也。「わがきたのかた」とハ、くもゐのかりハ、大ミヤのことををしへ給てしを、よくもひき給ハで、大ミヤにわかれ給ければ、ゆるらかにひきもとり給ハで、夕ぎりのまへにてハ、はぢてひき給ハぬ也。たゞ子どもあつかひいとまなくし給へば、おかしき^{いさ}所もなく、はらあしく、物ねたミし給へるばかりなると也。

一、「院ハたいへ」とハ、源氏ハむらさきのうへのかたに、わたり給へる也。

一、「うへとまり給て」とハ、女御の御かたにとまり給て、あかつきにたいへかへり給へる也。日たくるまでおほとのごもれる也。

一、「ミヤの御ことのねハ、いとうるさくなりにける」とハ、^{いさ}真実によくひき給たる、いかゞむらさきのうへきゝ給たる、と源氏の給へる也。「はじめつかた、あなたにて」とハ、女御の御かたにてきゝしほどハ、いかにぞやありつるを、こよなくひきあがり給たると、むらさきのうへの給へる也。「こよなく」ハ、ことなく也。

一、「さかし。てをとるゝ」とハ、女三のミヤにハてをとりて、おぼつかなくもあらでをしへたればとの給へる也。「これかれにも、うるさくて」とハ、夕ぎり女御なども、^{いさ}真実いとまいることなれば、を

しへざりし、と源氏の給ふ也。

一、「院にも内にも」とハ、みかども朱雀院も、きんハさりととも女三のミヤ^{いさ}ををしへ奉るらんと給ハするときゝて、このきんをだにとおもひて、をしへたてまつれる、と源氏の給ふ也。

一、「むかしよづかぬほどを」とハ、むらさきのうへおさなくおハしましたるほどをあつかひし時ハ、いとまもなくてをしへず過して、又ちかきよとなりてハ、ことにきゝあつかひきこえぬことのねのいでばへしたりしこそめんぼくありつれ。夕ぎりのかたぶきをどろきたりしも、うれしくおぼえ給し、と源氏の給ふ也。「かたぶき」とハ、物をふしんするありさま也。

一、「かやうのすぢも」とハ、ことひき給ふ事も、又わかミヤたちの御うしろミし給ふことも、むらさきのうへおとなくしくし給ふ、と源氏の給ふ也。「いとかくぐしぬる人ハ」とハ、むらさきのうへのやうに、なに事もたどぐしからずぐそくして、よき心ばへある人ハ、よにひさしからぬとの給ふ也。

一、「とりあつめたらひたる人」とハ、むらさきのうへのやうに、なに事も^{いさ}をたらひ給たる心ばへあらじと也。ことし三十七になり給へる也。「さるべき御いのり」とは、ことしハむらさきのうへ、やくねんなれば、御いのりなどし給へ、と源氏の給ふ也。われハことしげくもあれば、おもひめぐらして、おほきなるいのりどもせさせ給^{いさ}をのづからせさせん、と源氏の給ふ也。「こそうづ」とハ、北山のそ^{いさ}うづのおハせずなりにしこそさうづしけれ、との給ふ也。

一、「ミづからハ」とは、源氏、われハおさなくより、ことゝしくおひいでゝ、いまのよのありさまも、たぐひなき心ちすれど、又よにすぐれて、かなしきめをミて、させんせられしにかはりて、いまま^{いさ}でながらへける、との給ふ也。おもふ人さまゝにをくれど、御はミやす所、うばぎミ、ちゝみかど、あふひのうへなどに、わかれ給

し事かたり給へる也。

一、「きみの御身に」とハ、紫のうへの御身にハ、すまのわかれよりほかに、³³物おもふとても心みだるばかりの事あらじ、と源氏の給ふ也。

一、きさきといひ、つきくやんごとなき人のうへにこそ、かならずやすからずおぼさるゝ事ハおほかりけれとの給ふ也。「おやのまどのうちながら」とハ、おやそひたるやうに、心やすき事紫のうへの御身にあらん、と源氏の給ふ也。「此ミヤのわたり給へるこそ」とハ、女三のミヤのかくておハしますこそ、心ぐるしうおほすべけれど、それにつけてハ、いと心くハへ侍れば、おほしする事もあらんとおもへども、わが身のうへなれば、おほししらずやあらん、と源氏の給ふ也。

一、の給ふやうに、物はかなき身にハすぎたるよそのおぼえハあるべけれども、たえぬ物なげかしさのミうちそふや、さはミづからのいのりなりけり、と紫上のこりおほげにいひなし給ふ。はづかしげなると也。まことは、ゆくさきすくなき心ちするに、さきくもきこゆるやうに、³³あまになるべきことゆるし給へ、と紫上の給ふ也。

一、「それハしも」とハ、あまになり給はん事ハ、あるまじき事、そのあとにのこりてハ、いかゞせん。あけくれそひてへだてなきにこそ、なぐさめけれど、なをおもふさまことなる心のほどをみはて給へ、と源氏の給ふ也。

一、「れいの事」とハ、又ゆるし給ハぬを、あハれとおほす也。

一、「よろづにきこえまぎらハし」とハ、源氏、おほくハあらねど、人のありさま、とりく見給ふに、まことの心ばせおいらかななる人とハ、むらさきうへをこそいふべけれ、とおほす也。「大将のはゞき」とハ、あふひのうへやんごとくおもひつれど、つねに中よからず、

いまおもへば、くやしき事おほきとの給ふ也。わがあやまちのミもあらざりし。いかに心のとけ給ハリしかバ、打とけにくかりし、そのことのあかぬとおほゆる事もなかりき。あまりすくくしく、すこしさかしとやいふべからん、とおもふ³⁴にハたのもしく、みるにハわづらハしかりし人のさまになん、との給ふ也。

一、中宮の御はゞみやす所、心ふかくなまめかしきためにハまづおもひ出らるれど、人みえにくかりし。うらむべきふしハ、げにことハリとおほゆるふしを、ながくおもひつめて、ゑんぜられしこそ、くるしかりしか、と源氏の給ひいづる也。「ゑんぜられし」とハ、うらみられし也。「うちとけて」とハ、ミやす所にハうちとけてハ見おとさるゝことやあらん、とつゞミしほどに、やがてへだゞりにしぞかし。「あるまじき名をたちて」とハ、あふひのうへのたゞりになり給しといひしことを、ふかくなげき給しかバ、いとをしかりし、げに人がらをおもへば、わがつミあるこゝち侍る、そのなぐさめにもやと中宮をとりもち侍れば、それをミやす所かのよながら見なをし給ひぬらんとおもふ、と源氏の給也。

34

一、「うちの御かたの御うしろミ」とハ、あかしのうへなにはばかりのほどならずとあなづりそめしかど、心のそこみえず、うハベハ人になびき、おひらかにみえながら、うちとけぬ心したにこもりて、そこはかとなくはづかしき所こそあれ、と源氏の給ふ也。

一、「こと人ハみねばしらぬ」とハ、あふひのうへミやす所ハしらず、あかしのうへハ、まほならねど、けしきみるに、うちとけにくく心はづかしきさましるきを、たとしへなきうらなきを、いかにあかしのうへミおとし給ふらん、とむらさきうへの給ふ也。女御ハをのづからわがうらなき心おほしゆるすらん、と紫上の給ふ也。

一、さばかりめざましき物に、心をき給し人を、いまハかくあかしのうへをゆるしてみかハし給ふも、女御の御ためま心なるあまりぞかしとおぼすに、紫上の心ありがたしとおぼさるゝ也。(35オ)

一、「きここそハ」とハ、むらさきのうへこそ心のくまありて、「人により」とハ、人を見わきて、善悪分明なる心也。「こゝらみれど」ハ、おほく見れど、紫上のやうなる人なき、と源氏の給ふ也。「けしきこそ」とハ、物うらみけしきあると、たハぶれ事源氏わらひての給也。

一、「ミやに、いとよくひき給し」とハ、女三宮に、ことよくひき給しよるこびにとて、源氏わたり給へる也。「われに心をく人やあらん」とハ、女三のミや人より心をかれども、なにもおもハぬかほにて、たゞおさながましきやうにて、御ことに、心いれておハする也。

一、「いまはいとゆるしてこそ」とハ、御ことをもさしをきてやすませ給へ、と女三のミやに源氏の給ふ也。「物の師にハ心ゆかせて」とハ、われにも心なぐさませ給へ、と源氏の給ふ也。「心ゆかせて」ハ、なぐさめて也。

一、「日ごろのしるしありて」とハ、心をつくしてをしへししるしに、ことを(35ウ)よくひき給て、うしろやすくこそ思ひつれと也。ことをしやりて、おほとのごもりたる也。

一、「たいにハ」とハ、紫の上ハ、源氏のおハしまさぬよハ、よひるひさしくし給て、物がたり人々によませ給也。「むかしがたりにも」とハ、かやうの物がたりにも、おとのあだなるにおもハるゝをんな、ふた心あるおとこにちぎりたるをんなのことをいひあつめたるにも、つるによるかたありてこそたのもしけれ、われハうきてもすぐしつるかな、と紫上おもひ給ふ也。「つるによるかた」引哥、おほぬさと名にこそたてれながれてもつるによりせバありといふ物を、伊勢物がたりよませ給たる也。

一、「げに、の給ひたるやうに」とハ、源氏のの給ひたるやうに、人よりことなるすぐせもありながら、人のしのびがたくする物思ひも身にはなれずこそあれ、とさまぐ(36ア)紫上おもひあつめ給ふ也。しのび(36イ)がたきハかんにんしがたき也。よろづおもひつゞけてふし給へるあかつきより、むねをやミ給ふ也。「御せうそこ」とハ、源氏につげ奉らんと人々きこゆれど、いとびんなきことゝむらさきの上いさめ給ふ也。

一、「御身もぬるミて」、引哥、人しれずわがおもふ人にあハぬよハ身さへぬるミておもほゆるかな、「院もとみ」とハ、源氏もにわかになり給ハぬ也。

一、「女御の御かたより」とハ、紫上に女御より、御せうそこあるに、かく紫上なやミ給ふとの給ひたるに、をどろき給て、女御源氏にかくなんとつたへ給へるに、源氏むねつづれていそぎわたり給へる也。

一、いかなる御心ちぞと源氏紫上さぐり奉りなどし給ふに、身もあつくおハすれば、きのふきこえしつゝしミのことなどをおぼしあハせて、をそろしく源氏おぼす也。日ひと(36ウ)いそひみ給てみ奉り給ふにはかなき物もきこしめさず、おきあがり給ふ事たえて日ごろへぬる也。(36ウ)

一、「そこ所ともなく」とハ、いたき所などもなく、わらひ給て、御むねハ時々おこりなやミ給ふさま、たへがたくみえ給へる也。「御つゝしミ」とハ、いのりなどをかぎりなくし給へど、しるしもみえぬ也。一、「おもしと見れど」ハ、やまひハおもくミゆれど、をのづからをこたるけぢめあるハたのもしきと也。「をこたる」ハ、やまひの快氣する也。むらさきの上の御なやミハ、おもくもみえ給ハねど、又なをり給ふきハもみえず、たゞ心ほそくみえ給ふと也。「こと事おぼされず」とハ、別の事おぼされず、源氏なげき給ふゆへ、朱雀院の御

賀もしづまりたる也。

一、「かの院よりも」とハ、朱雀院よりも、紫上の御なやミきこしめしつけて、たび／＼御とぶらひきこえ給ふ也。御なやミおなじさまにて、二月もすぎぬる也。心ミに所かへさせ給ふとて、二条院にわたし奉り給ふ也。

一、「院のうち」とハ、六条院のうち、ゆすりみちてなげく也。「ゆすり」とハ、（37オ）うごきミちて也。

一、冷泉院もきこしめして、紫上うせ給ハ、源氏もよをそむき給ふべし、となげき給ふ也。夕ぎりなども心つくしてなげき給ふ也。

一、「いさゝか物おほしわくひまにハ」とハ、むらさきのうへ心ちすしもよきひまにハ、あまになり給ハんと給ふ事を、さもゆるし給ハで心うきとのミうらみ給ふ也。

一、かぎりありてわかれば給はんよりも、めのまへにわが心とやつし給はん御ありさまを見奉りてハ、かた時たふまじく、とげんじ給ふ也。「むかしより、ミづからこそ」とハ、われこそ入道をとくせまほしくおもひしかど紫上のとまりておぼされんことの心ぐるしさにこそ、とし月をすぐしつれ、と源氏の給ふ也。さかさまにわれをうちすてゝあまになり給ハんとやおぼす、とのミおしミ給へる也。

（37ウ）

一、「ミヤの御かたにも、あからさまにもわたり給ハず」とハ、女三の宮のかたに、わたり給ハぬ也。「あからさま」ハ、かりそめ也。「御ことども」とハ、女三の宮のごとも、ひきこめをき給たる也。「院のうちの人」とハ、みな二条院にまいる也。此院ハ火をけちたるハ、如新盡火滅を引也。六条院ハ、「人ひとり」とハ、紫上のひとりのためにもはやされたとみえたる也。女御のきミも二条院にわたりて、源氏もろともにみ奉り給也。「たゞにもおハしまさで」とハ、懷妊にておハしますに、物のけをそろしと紫上の給ふ也。「わ

か宮の」とハ、女一の宮也。うつくしきをおとなび給ハんをみ奉らずなりながくちおしき、と紫上の給ふ也。

一、女御せきあへずなミだながし給ふ也。ゆゝしく、かくなおほしそ、と源氏の給ふ心によりて、人ハともかくもある。「をきてひろきうつハ物」引、小取焉小三得福、大取焉大三得福、孝經、紫上ハ心をきてひろけれバ、いのちのび給ハんと也。

一、「たかき身となりて」とハ、せばき心ある人ハ、高家なりても生得をあらハすと也。（38オ）

一、「佛神にも申あきらめ給ふ」とハ、紫上の心つミなきさま申給ふ也。「おほしまどへる」とハ、源氏の御ありさまをみ奉りて、そうたちも、心おこしていのる也。月日をへて、なやミ給へば、よかるまじきやまひかとおぼすに、源氏御心のいとまなき也。

一、「衛門督ハ中納言」とハ、かしハ木中納言になりたる也。「いまのみよ」とハ、今上の御代にハ、したしくおほしめす也。「おもふ事かなハぬ」とハ、女三の宮おもふ事也。

一、「此宮のあね宮」とハ、女三の宮のあね、女二の宮也。かういばらなれば、心やすくかしハ木おもひ給ふ也。「もとよりしみにし」とハ、女三の宮思ひしミたると也。「人めにとがめらるまじき」とハ、女二の宮人めばかりに、柏木かしづき給ふ也。「なをかのしたの心わすれず」とハ、女三の宮をわすれず、小侍従といふかたらひ人ハ、女三の宮のめとのむすめ也。「そのめのと」とハ、侍従がは、ハ、かしハ木のめとなれば、したしくいひかハし給て、女三の宮の御ことをかしハ木きゝ給たると也。

一、「はやくより」とハ、むかしより、女三の宮の御事を、わがめとのつたへにて、（38ウ）よくかしハ木きゝ給たると也。「おさなくおハしましし」とハ、女三の宮のありさま、朱雀院のかしづき給ひしまさきゝて、かしハ木かゝる物おもひもつき給たると也。

一、「院もはなれおハします」とハ、源氏も二条院におハしますほど、人すくなくて、女三のミやおハすらんとをしはかりて、かしハ木小侍従をむかへとりてかたらひ給ふ。むかしより、いのちたへがたくおもふことを、したしきよすがありながら、女三のミやにつたへし

らせたてまつりて、そのしるしなれば、つらき。朱雀院さへ、あまたの中に人にをされ給ふやうに、女三のミや御ひとりねがちにてすぐし給ふと、人づてにもきこしめして、女二のミやのうしろやす

き、ゑもんのかみにちぎり給てゆくすゑうしろやすきとの給ハする

とつたへきくに、いかゞハおもひみだれたらん、おなじすぢにハたのミながら、それハそれとこそおほゆれとかしハぎの給へば、³⁹「小侍従、あなおほけな。それをそれとさしをきて、又いかなる御心ならん」とハ、女二のミやをさしをきて、女三のミやかしハぎ心

かけ給ふハおほけなき心といへる也。「おほけなき」とハ、身過たてのぞミといへる心也。かしハぎほゝゑミて、物ハさこそはあれ。女三のミやに心かけ奉りし事ハ、朱雀院もみかどもきこしめして、など

てか、さてさぶらハんにあしくハあらんと、このつゝるでにの給ハせけるときゝしを、たゞすこしの御いたハリあらばゆるし給ふべき物をとの給ふ也。「いたハリ」とハ、わがれんほの⁴⁰労をおほしめし

りたらバの心也。労の字、いたハリとよむ也。
一、いとかたき御事、御すくせといふ事ハ、をろかならねば、源氏のこといでての給ハんに、たちならびさまたげ給ふべき御身のおほえとやおほさるる。此ごろこそ御ぞの色も物くしくなり給へれといへば、かしハ木中納言になりて従三位、むらさきのうへのきぬになり給たると⁴¹小侍従いへる也。「はやりかなるくちごハき」とハ、弁舌きゝてくちはやく小侍従いひたる也。
一、「いまハよし」とハ、むかしの事ハいハじ。たゞかくありがたき源氏のおハしませぬひまなれば、女三のミやにちかくまいりよりて、

心のうちにおもふ事すこしきこえさせつべくたばかり給へ。おほけなくおもひよる心ハなし。をそろしければ、⁴²実事ハおもひはなれたる、とかしハ木の給ふ也。

一、これよりおほけなき事ハ、いかゞあらん。むくつけき事をもの給ふかな。なにしにまいりつらんと、「はちふく」とハ、はちのとびかゝる時、ふきはらふやうにいひはらふ也。

一、あなきゝにく。あまりこちたく物をこそいひなし給ひけれ。「女御、きさきも」とハ、二条のきさきのこと也。なりひらになびき給たるためしもあり。「その御ありさま」とハ、女三のミやハ、きさき

にてもなしといへる⁴³心也。「うちくハ心やましき」とハ、女三のミやハ、むらさきの上につけをされておハしますときゝたる物也。朱雀院の、ならびなくならハし給しに、ひとしからぬ人にをされ給

ふハ、めざましき事もおハしますらん。よの中ハつねなきを、一かたに思ひさだめて、はしたなくつゝるきりなる事なの給ひそよとかしハ木の給へば、「ひとしからぬ」とハ、ひとつくらゐならぬ也。「はしたなくつゝるきり」とハ、こハくつきゝるやうになの給ひそと也。

一、「人にをされ給へる御ありさま」とハ、女三のミや、むらさきのうへなどにをされ給ふとて、あらためてめでたきかしハ木にちぎりかハし給ふべきかハと、これよのつねの御ちぎりにもあらず。源氏をおやさまの御うしろのミに、ゆづり給しかバ、「かたミに思ひかハし給へる」とハ、むらさきのうへもたがひおやこのやうなるとおもふに、あひなきおとしめごとになんとて、はてくハ小侍従はらたつ也。

「おとしごと」とハ、女三のミや、きさきにて⁴⁴ハおハしませずとおとしめことばなの給ひそといへる也。
一、「よろづにいひこしらへて」とハ、いひなぐさめて、「よになき御ありさま」とは、源氏を女三のミや見奉りなれ給へる御めに、「あやしきなれすがた」とハ、いやしきやつれすがた、女三のミやに御ら

んぜられんとハ、さらにおもひかけず。たゞ一こと、物ごしに申し
らせんほど、たばかりよせ給はんハ、なにばかりの女三のミヤのや
つれにかハあらん。ほとけかミにもおもふこと申すハ、つミある事
かハと、ちかことをしつゝおほくの給へば、「ちかこと」ハ、ちかひ
也。

一、しばしこそあるまじき事と小侍従いひかへしけれ、物ふかゝらぬ
わか人ハ、かく身にかへてかしハ木いみじくの給へば、いなびは
てゞ、もしさりぬべきひまあらば、たばかりきこえん。源氏のおハ
しまさぬよハ、ミちやうのめぐりに人おほく、おましのほとりにさ
るべき人さぶらへば、いかなるおりをかハひまとはみつけん、わ
びつゝ小侍従かへりまいりぬ。（41オ）